

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

災害、記憶、写真：回収されることを拒む記憶たち：
機関研究：

「マテリアリティの人間学」領域 モノの崇拜：
所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5228

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域
モノの崇拜：所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）

泥にまみれた写真が語るもの

岩手県上閉伊郡大槌町は、東日本大震災で最大の被害を出した市町村のひとつである。町役場、図書館、警察署、消防署などの主要施設が全壊し、人口約1万5千のうち1割を超す人びとが命を失っている。他の被災地の多くが、混乱を避けるためか、被災直後に外部支援者を受け入れていなかったのに対し、すべての機能を失った大槌町は断る余裕もなかったのだろう。地震から3週間経過し、親子3人で被災地支援に向かおうとしていた私たちにとって、大槌町は岩手県下で唯一外部ボランティアを受け入れている地域であった。

北陸道から東北自動車道にまわり、花巻で高速をおりて、遠野、釜石、大槌へと車を走らせる。釜石駅から先は、とてもことばになるものではなかった。信号はすべて失われ、道路の両側にはガレキが積み上がり、鉄筋の建造物をのぞいてすべてがなくなっていた。わずかに残った鉄筋の建物さえ、壁は大きく破れ、火災が深い刻印を残していた。大槌町のボランティア・センターに行き、ガレキの撤去でも何でもやりますといったが、私たち3人では力不足と思われたのだろう。書類やアルバムの整理をするよう依頼された。

ガレキの撤去は危険をとまなうため、被災後数ヶ月のあいだ、自衛隊の任務とされていた。泥まみれの迷彩服に身を包んだ隊員が、毎日20箱、30箱と、書類やアルバムを運んでくる。それを分類整理し、表面にこびりついた泥をとり、のぞいて、住民にお返しするのが仕事であった。若い自衛隊員にとって、建物の解体や廃材の運搬はお手のものだっただろうが、人間の記憶の籠ったアルバムや書類は対処の仕方がわからなかったのだろう。それらの詰まった泥だらけのボックスを運びこむと、一様に安堵の表情を浮かべるのだった。

書類のなかには卒業証書や身分証明書があったし、貯金通帳や権利書さえ挟まれていた。アルバムやバラバラになった写真のうちで、もっとも多いのは結婚式の写真であり、生まれたての乳児の写真であり、入学式や卒業式の写真であり、家族の集合写真であった。人間の一生のうちに生じるさまざまな出来事と、社会のなかで生きていることの証しであるそれらの品々。それを失った人びとは、どのようにして記憶を呼び起こし、紡いでいけばよいのか。毎日100冊を超えるアルバムが運び込まれて

いたが、人口の半数以上が被災した大槌町民にとって、それはごく一部でしかなかったはずだ。

戦争の記憶と出征兵士の写真

戦争に明け暮れた20世紀は、急激な経済発展がもたらした災害や公害があいついだ世紀でもあった。20世紀を動かす原動力となったのは、戦争と経済発展の主体である国民国家であったが、B. アンダーソンの議論を待つまでもなく、国民国家とは「記憶の共同体」にほかならない。国家は領土内に住むすべての人間の能力と意欲の総体を国家に向かわせるべく、国民の記憶を操作しようとしてきたが、記憶に拘泥するのは国民の側もおなじであった。写真や印刷物、映画などの技術が発展したこともあり、20世紀を通じてさまざまな媒体が記憶の保存と捏造に動員されたのである。

アルバムの泥を落とす作業に従事していると、古いアルバムには出征兵士の写真が多く含まれていることに気づく。写真に写る兵士の何人が戦場で命を失ったのかは知るよしもないが、それらの写真は、国家の力が個々の家族のなかにまで浸透していること、家族や個人の記憶が国家の記憶と切り離しがたくむすびついていることの、証しといえる。

20世紀に生じたさまざまな事件や出来事のうち、国家による記憶の操作が徹底し、国民ひとりひとりに拭いがたい記憶を植えつけたのが戦争であった。近現代の開始時には、16-18世紀の英西戦争や英仏戦争、普仏戦争といった国民国家の誕生を標した戦争があったし、それ以来、甚大な人的・物的被害をもたらした2度の世界大戦にいたるまで、近現代とは戦争の時代であった。それに加え、アメリカ独立戦争にはじまる独立のための戦争があり、フランス革命やロシア革命に代表される体制

変革のための戦争があり、東西冷戦下では朝鮮半島やベトナムで戦争がおこなわれ、この20年余りは民族や宗教の対立の名のもとで戦争がつけられている。

こうしてみると、戦争と無縁に成立・存続した国民国家など存在しないことがわかる。その意味で、国民国家とは「想像の共同体」である以上に、国家のために死んだ死者の上に建てられた「死者の共同体」といえる。どの国家であれ、死者をまつらない国家は存在しないのであり、死者に養われることがなかったなら、国民国家は枯渇し、死に



大槌町の民宿の屋上に打ち上げられた、観光船はまゆり号。津波の記憶を残すために保存運動がおこなわれたが、危険だという理由で解体・撤去された。

絶えるのだろう。そのことは、外国の元首が必ずといってよいほど訪れるのが、「無名兵士の墓」であることがなにより雄弁に物語っている。

外国の元首が無名兵士の墓に花輪をさすけるのが、集会的な死者の悼みを通じて2国家の友好と称揚を演出する象徴的行為であるのに対し、家族のアルバムに収められた出征兵士の写真が示しているのは、あくまで個人的なひとつの家族が抱きつづけるひとりの個人の記憶である。そのことは、兵士の写真が孤立してあるのではなく、家族や地域社会の人びとの顔に挟まれていることが物語っている。しかし、その個人と家族は、国家という無慈悲ですべてをのみ込む歯車装置の記憶とは無縁に存在しないことを、かれが身につけている軍服が如実に示しているのだ。

全体的であり、かつ個別的であること

明治以降、日本国家は靖国神社や招魂社（のちに護国神社）を建立し、村々に忠魂碑を築くことで、個別的であるはずの国民の記憶を回収し、操作しようとしてきた。とはいえ、国家ないし集団による死者の祈念の仕方は一様ではない。国民国家が無条件に善とされていた時代には、戦争の立役者である将軍や元帥は英雄視され、銅像が建てられ、地名に名を残した。靖国神社もそれであり、敵と味方、銃後の者とを峻別し、前者のみを神としてまつのが靖国の基本である。一方、近年に生じているのは、すべての死者をひとしくまつろうとする姿勢である。たとえば1995年に建設された沖縄の「平和の礎」は、沖縄戦で亡くなった24万余の死者の名前を、国籍や軍人・民間人の区別なく記録し、慰霊しようとしている。

すべての死者をひとしく扱おうとするこのような姿勢には、戦争の遂行主体でありつづけた国民国家を批判的にのりこえようとする意図がひそんでいるのだろうか。たしかにそうかもしれない。しかし、注意が必要である。ひとつの記憶の表出は、もうひとつの記憶の抑圧をもたらしかねないためである。すべての死者をひとしく扱おうとする「平和の礎」が語っていないのは、第2次世界大戦中に旧日本軍がアジアの各地で民衆を手につかき、多くの犠牲を強いたという事実である。それについて言及しないなら、それは否応なく記憶の抑圧に手を貸すことになる。それを避けようと思うなら、想像できるかぎりの記憶を拾い上げていく努力、できるかぎり全体的な記憶を記録しようとする努力が、必要なはずである。

それに加え、記憶の表出には別の問題がある。戦争であれ、公害であれ、自然災害であれ、甚大な被害をもたらした事件や出来事は、集会的な記憶を生み出す一方で、それを経験した人びとひとりひとりにたいして、異なる記憶、異なる経験をもたらしたということである。被災地で支援活動をおこなった私たちは、日常的に接した100人を超える被災者から、被災の経験と被災後の行動について話をうかがった。ある人は黒い津波に呑みこまれたときの恐怖について語り、ある人は津波に運ばれていく屋根の上で手を振っていた女性の顔について語り、ある人はロープでガレキを引いてヘリポートを作ったことを語った。しかもその作業には中学生までもが参加していたのだった。かれらの語る話にはなにひとつおなじものはなかったが、それは津波の泥をかぶった書類や写真に1枚



津波の泥をかぶった写真の一部。毎日、千枚を超える写真が、家屋とガレキの整理をする自衛隊員の手で運び込まれた。

としておなじものがなかったのと同様であった。このように個別的で多様な経験と記憶を、私たちはどのようにして語り伝え、保存していくことができるのか。

それに適切なその場と形式を与えることができなかつたら、経験は風化し、記憶は失われていこう。その意味で、記憶を記録し、保存することは緊急に必要なことである。反面、その場と形式ができた瞬間に、それらの記憶や物語は定型のなかに回収され、かけ

がえのない個性が失われていく危険がある。個々人が経験した戦争の記憶が、ナショナリズムの語りや鎮魂の語りのなかに回収されてしまったことを、私たちは嫌というほどみてきたのではないか。

あくまで全体的であり、かつ個別的であるような記憶の保存と表出の方法は、どうしたら可能になるのか。人間の記憶とモノの保存と展示の施設である博物館は、どうすればそのような要請にこたえることができるのか。博物館の使命のひとつが、個性を一般性のなかに回収させることのない、開かれた記憶と自己認識の創出をめざすことであるとすれば、どのようなモノの選択と配置がそのような記憶と自己認識を可能にするのか。

私たちが経験してきた、戦争や内戦、自然災害、公害といった悲惨な出来事をめぐり一連の語りを吟味しながら、定型として受容されている語りに穴をあけ、そこからさらさらとこぼれおちる一粒一粒の砂のような記憶の保存と表出の仕方を探ること。そこからもう一度、集会的で全体的だが、個性を喪失しない物語の再創出をはかること。それが、本プロジェクトのめざすもののひとつである。



ガレキのなかには、さまざまな思い出が込められていたであろうモノが多数ある。

たけざわ しょういちろう

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。機関研究「モノの崇拜：所有・収集・表象研究の新展開」研究プロジェクト代表。2011年4月より約5ヶ月にわたり、岩手県大槌町や釜石市で住民主体のまちづくりに協力しながら、被災後の住民の行動の聞き取り調査をおこなってきた。